

浪白人五保事

物を下さいましたが……大方此様な事だろうと存じ  
ました實の妾も心が置けずから……御覽なすつて下さ  
いまし……と店の傍より柳行季を出し其中を明すと云  
ふとは是迄權十郎が持て来て遣た浴衣地馴下駄手拭掛湯  
巻等種々物が入て居ましたみお覺へも御座いませ  
うが是の皆貴郎から頂戴ました物では座います……何う  
も此様な物をお貰ひして置くの心掛りゆへ誠に相濟  
ませんが速にお返却申す……子分衆親分のお宅へお持  
歸りを願ひます……此時權十郎の憤然と致しまして權宜  
いワイ能くも是迄耻を與せたナ……ヤイ兩人の奴眾我  
慢をしすも持て往け誰か又與ア喜んで貰ハ此様なもの  
でもサ持てけ……空ニ、持て往きやすとも親分が要あ

浪白人五保事

みやア小者が貰をう……權サア出掛けやう……ヤイお  
みの覺へて居ろ……とキツと腕んで出たるが此權十郎と  
云ふ奴も悪黨ながら親分株斯迄分らん奴でもあいが痴  
情迷ったものと相見へますおみの出て往く三人の跡を  
見送りましてみ借も無法な長脇差此伊政治の殿しいの  
まア云ふ者が威張つて居ると云ふの未だく田舎の  
開けさいか知らんア今日と云ふ今日の品物を返却して  
仕舞ひ胸が晴々した……と其跡の何の氣も附ず又翌日も  
早朝よりおみの此處へ出まして店の掃除や何や角や  
氣を附けて居る中よ愈々夕景又相成まして今店を仕舞わ  
んと思つて居所へ怪しい奴が兩人計り来たなり即ち昨日死  
よ次第よ附いて来た照吉宗之助の兩人で有ます 照細君



享保五人白浪

さんチツと用が有るから待て呉んあせエ  
昨日親分と一緒よか出の兩人さん  
宗オ、見覺へが有  
から隠しやア仕ねへがチイツと和女  
又用が有るから見  
角他と一緒よ来てお呉んあせエ  
みハイ今店を仕舞  
ひまして……来いと被仰るの何處へ  
照何處も彼處も  
要ねへ道杯の搦わねエ……と云ふが早い  
か風暴狼藉忽ち  
おみのを擡上げました  
みアレ……とおみのの聲を揚  
げるを一人がさうく又手拭取て口を縛り  
揚げました  
が往  
來途絶し地獄河原ゆへ誰一人救ふ者も  
御座いません  
のフレ……と悶搔き廻るおみのをば手  
取り足取り搦  
揚げ三町計り離れました所の空寺へ  
擡込ました固より無  
住されバ狐狸の巢窟よ相成て居ます  
空寺の本堂へ擡上る

享保五人白浪

と云ふと正面の所又大胡座を搔て煙草を  
バクク呑で居  
ました  
彼の權十郎  
權兩人共大さ  
骨折だつたノウ  
兩人エ、親分漸く婦人ア捲上げて  
来ました  
權イヤ御苦  
勞く……サア阿魔ツ女幾許泣いても  
吠いても此通りの  
空寺だ能くも昨日俺も耻を搔せやア  
がつたナ今日  
の不本意あがら男の意氣地十分強  
姦で遣るから然  
う思つ  
てけつかれ……照へ、親分エ何ふ  
せ貴郎が女房よ爲  
やうと云んチャねへから何うか和郎  
さん本望を遂げたら  
二番手三番手は是又相へて居ます  
からへ、お餘りを情  
願か……權夫れは汝等の勝手よ爲  
ろイ宗エ然うで  
すかい……照吉有難エあるア……  
夫れチャア成丈けお早く  
權ウ……と悶搔きまわる件の真女  
を取つて抑へ

手取り足取り既に強姦及ばんとするおみのは聲を限り  
よみアレエー……助けて下さいましたと脱れた手拭を拾  
て又おみの口を縛ろうと致しと此聲外も漏れたと見へま  
して一人其處へ飛んで来た者が有ます年齢廿五六又成る  
若者で若イヤ……此泰平の世の中は幾許無住の空寺  
でも女を捕へ強淫を爲やうとするのは何處の何奴か知ら  
ねへが太へ奴も有れば有る者だと六尺棒を持まして突  
り彼の若者よ於ては權十郎が今情慾を逞んとする背  
ら若イヤ……と駈ち下す不意を喰つて權アツ……と  
後ろの方へ倒れました子分兩人の照汝れ邪魔を……と  
云ひおがら飛び掛つて来る照吉の素首を棒で惱ませたから  
照吉も同じく一聲の爲めよ照アツ……と云て倒れまし

た今一人の宗之助と云ふ奴が脇差又手を掛けやうとする  
所を隠さず棒を取延べ躓込み脾腹をドンと突く脇腹を突  
れ宗之助は宗ハッ……と打ッ倒れる彼の若者は棒を持  
て立上アがりおみの向ひ男コレ女中飛んだ事では座  
いきました……アお負傷アは座いませんか身体ア汚しや  
ア爲せせんか……おみのは箱く蘇生の心地み有難うは  
座いきました……今暫時の間も身を汚します所貴郎の庇  
で助りました……と腰も露わも成て居るを耻しうう前  
を掻合せ乱れた丸鬘の後れ毛を掻き上げながら互に見換  
す顔と顔みイヤお前の小澤村の藤三殿藤イヤ伊太郎  
さんの内儀か是の……と驚きました抑も此小澤村の藤  
三郎と云ふ何者ぞ所聞番太で御座います(替稱)多で有

浪白人五保享

ます此小澤村と申すの往昔の穢多村ですが藤三郎の志想  
の正しき者ゆへ領主の役人又愛されて夜廻りの役を命ぜ  
られ毎夜在々の非常を戒め又興行物の有る時の腰へ朱總  
の十手を差て警護に出て其他御處刑者一切の役を勤め先  
づ目明の下役見た様な者で有ます今日も棒を携へて此近  
傍を巡邏致して参つた處此空寺又女の泣聲が聞へたので借  
こり此處へ來たり何人も知らず先づ曲者等を惱まし而  
して婦人を助け始めて互よ名乗り合ひ場合又至りました  
ので有ます死な次第の權十郎の突然り後ろから打れて氣  
絶する程でゐるが驚天をして四方を見るも兩人の子分  
も其處へ倒れて居り己れの本望を遂げず尙又棒を持って立  
て居る奴の何者かと思ひ振り顧て權イヤ……汝の穢

浪白人五保享

多の藤三だなア藤オヤ……貴郎の死に次第の親分さま  
是の……と計り藤三郎の仰天し棒をガツリと投捨まして  
兩手を支へ藤親分誠よ濟ません……何本親分御免成す  
つて下さいまし……此悪戯者を和主さんだと思ひまして  
も私が役目だからおみのさんを助ける事ア助けるが譯を  
云つて此様な事ア止めて貰ひますのを貴郎さんとの知らず  
他國の悪漢が來て女を強淫すると思つたから一私も役柄  
ゆへ據あく手荒い事を致ましたが後から見ても貴郎さんと  
の氣が附かなかつた何本親分は免かすつて下さいまし……  
子分の衆も氣絶ウして居る様子では坐います何うぞ親分  
御免成すつて下さいまし……權喧しいやイ斯う弱身へ  
附込れちやア仕やうがねへ道ならねへ事を爲やうとして

浪白人五保享

汝よ斯う幸い目よ會たの此權十郎のヤキのまはる係り  
小口と云へ此高田で衆人よも知られた此權十郎をば  
汝アケナを附けやアがッたア覺へて居る 藤夫何うも  
實郎お腹立ちの甚だ困り升…… 權エ、いくどく云よ  
ア及ばねへ今の機會が悪いが藤三郎何れ長二月日の中よ  
アお禮をするから覺へて居ろアハ、宜いお役人だ女  
を介抱して遣れ……と權十郎の胸の解れぬ容子 藤ア、  
詮方がない何と言つても堪忍して呉いと云ッしやるな  
ら……此方の役目で爲た事明日が日此身よ災禍が罹ろう  
とも何様お恨みが來様とも天道様が承知だ……サア伊  
太郎さんの細君さん徐々出掛けやせう賊よ危い事では  
坐いましたと棒を小脇よ抱込みおみのを隠れて藤三郎の

浪白人五保享

第十一回

スエトとして此空寺を立出ました跡を見送る死よ次第  
の權十郎キツと思案を定め兩人の子分を稱く介抱し心  
殘して是れも己が家路へ戻りました抑も此事が越後高田  
よ於て穢多殺しの原因と相成ます  
享保九年の秋の事では座います越後國(前)回も陳べました  
例の小千谷街道地藏河原とやす所に於て夜廻りの穢多  
三郎が非業ある死を遂ましたとやす原因の前回にてお話  
を致しましたが此藤三郎は身分よ似合す至志の宜い者で  
伊太郎の妻おみのを慰撫して玉井村へ送り届け 藤お細君  
さん先づ當分の茶店へ出なさらん方が宜しう伊座い升何  
しろ相手が惡ふ伊座いますから併し此様事には伊太郎さ

享保五人白浪

んにもお話を成さらん方が却て宜ろうと思ひます... 何から何まで親切有難う存じます... 名主様へ  
もチヨツとお話をして當分茶店へ出るの休み升り... 送届けて道  
ア、く然うした方が宜う座い升り... 役向でした事で  
り一方の濟んだが只心よ保つて居ます... 權十郎の方へ詫も在  
有ますから其儘打捨て置き別々權十郎の方へ詫も在  
さません時よ九月の事で此は城下又祭禮が有まして尤も  
非常を警むるが例の藤三郎の役目で有ますから警護も出  
て高田の城下外れの十一屋と云ふ酒屋に於て大層は馳  
走し相成まして種々肴の喰残り赤飯の類を折詰め致し  
して十一屋の主人が主藤三郎和郎此残り物の母親も持  
てッて還るが能い孝行か和郎だから母親も待て居だるう

享保五人白浪

から藤ハイク有難う存じます... 今日の大層は馳走も相  
成ました其上又母親へまでお土産を下さいましてハイク  
有難う存じます... 今日のは是でお祭禮も済みましたから私の役  
も終りましたが明日また跡片付けで歩坐い升り... 是の歩  
新造さん有難う存じました... 亭主夫れヤア氣を付けて  
お出よ藤へ... と棒を小脇に抱込み左りの手も貰つ  
た物を提てオラ、くど差掛りました例の地藏河原...  
藤ア、此夏で有ったッけナ此先の古寺で伊太郎さんの  
細君さんを死な次第奴が強姦と仕やアがつたから彼の時  
思わず出會ひし辛い奴も會わして還り彼あり又成て居る  
が先方も悪い事だから俺を憎んだけれ共断念た者と見へ  
るま、俺も宜い加減又此様な役も止らまつて通常の職

浪白人五保享

の方が安泰で宜い……と獨言を云て居る後から何時の間  
よか男が出て 男、ヤイ穢多ア待て……不淨人待て……  
ヤイ汚れ待て……畜生待て……藤三郎待て……藤何  
んだと俺の事、ヤアおいと思つて居たが穢多不淨人汚れ  
畜生とまでい何の事だと思つて聞いて居たが成程俺の穢多  
よやア違いいねい穢多よやア違ふねへが名が有や藤三郎  
と呼ばれて始めて俺の事だと気が附いたが……何人だへ  
男生意氣な言を云ふねへコレ俺の面ア思へて居るか  
藤「イヤア……此方ハ死ム次第の親分の駒箱を擔いで居る  
照吉どんかイ 照オ、乃公だ……宗之助イ 宗、オ、イ  
……と堪の蔭から躍り出たる宗之助が 宗、照吉氣丈り  
爲ろイ……ヤイ藤三郎もしねへ此六月親分の仕事の手

浪白人五保享

傳ひを爲て居た處を汝ア能くも乃公等よ疵ウ付けたナ水  
より滑い乃公等の身体へ汚れの汝の棒で打れ夫から此方  
ア鼻が曲り身体が汚れたが目が立たねへ今日と云ふ今日  
の共仕返しをするのだサ覺悟をして待てろいと云はれ藤  
三郎ハ一生懸命十一屋から貰て来た折を道の片脇へ靜か  
よ置て棒を取直して身構ひあし 藤然う吐しやア最うお  
詭アしねへ覺悟を爲ろ……と云ひあがら棒を振上た兩人  
の子分も扱連れて斬て掛り一上一下と切結んで居ます其  
後から又一人夫へ出て卑怯未練よも長やかなる所の棒を  
持て来て突然り藤三郎の脳天を一ツすばア、打た藤三  
郎は 藤ハッ……と身を曲せたから左りの耳の所へ一撃  
来た藤三郎 藤アッ……と驚ろきあがら振向く機會よス



享保五人白浪

ツツと立たる男の即ち死す次第の權十郎 權十郎 殺  
しちまツちやア往ねへく サア手を取れ足を捕れ……と  
去ふ藤三郎の此時迎も難敵んと知まして大地へ兩手を突  
き 藤イヤ！親分誠は濟ません……其仕返しは必定有る  
だろうと待ちやア居あいが思つて居ました成程も立ち  
ましたらうが六月の事全くと知らず仕た事では坐いま  
すから何卒は免さすつて下さいまし親分は免さすつて  
…… 權十郎、何を吐しやアがある今更身法を言を吐す  
ねへ 藤三郎、何卒は免ささいまし……と發の聲又大  
地へ平服で居る藤三郎を慈悲も情けも知らぬ權十郎足を  
揚げ駒下駄にて藤三郎の眉間をした、かよ蹴ました子分  
の奴等も弱身へ附込み踏むやら蹴るやら叩くやら藤三郎

享保五人白浪

の此時苦しき息をホツと吐き 藤「か手向ひ致ましたの返  
すくも酒の上今日鎮守の祭禮で十一屋さまでは馳走よ  
成ましたが少しお神酒の加減で不圖氣の強い事を云まし  
たが子分の衆や親分達の猶のこと仮令ひ蹴れよも他人の  
女房又彼様な事を成さるから夫れも尊公と知らずして打  
た私に役目ゆへと彼れ程お詫びを仕ましてもお聞容れが  
御座いませんか處も變らぬ地蔵原河で此御打擲も成ます  
の皆身から出た錆夫ゆへ私の一命を取ると被仰るだろう  
が若し親分さまは是はバツかりの卑怯のやうだが許して下さ  
いまし……近頃愚痴あやうでの御座いますか年老た母親  
が私の死んだ後の身も世も御座いませんものゆへ若し親  
分強いばかりが長脇差の規約でも有ますまい慈悲を知る

浪白人五保享

も親分様何うぞお慈悲の事御推量下さい  
まして尙た此上は疵を附けられるとも夫れに決して厭ひ  
ませんが命計りの助けあされて下さいませぬと血だらけに成た藤三  
座います手を合せて拜みますと血だらけに成た藤三  
郎の堤の上へ兩手を支へまた手を合せて種々様々に入  
りました死な次第の大口開いて打笑ひ 榎何んだ母親が  
如何したと……苦痛の時親を出せと能く云ふ言だが……  
サア照吉宗之助此奴を縛ッちめへ 藤夫で親分何  
う在ても 榎當然ヨ……ッレ 兩人オ、合点だ子分の  
藤三郎の左右の足首を一ツと細細で括りまして堤から河  
原の下へ引下す身依砂利よて摺れ 藤ヒイく と云ふの  
を榎十郎が差圖を致し蛇蝎の所まで曳摺り来たッて

浪白人五保享

榎一ト息吐く為め水でも喰わして遣れ 子オ、合点  
だ……と岸邊の深く水の溜つて居ます所へドブと打  
込み暫時経てまた引上げて水を入れ岸邊の蛇蝎へ倒  
さし引上まして榎十郎の刀を抜いて手の手足は足と斬放  
し羽殺し致して遂々倒さし吊したあり止めを刺して跡  
白波何處共なく往て任舞ひました殘酷と云ふも亦余り有  
る事では座い升且説此事の間で有ますが祭禮の場  
所が群集故此處等の人衆も通行んから何人も知る可き様  
もない翌日成て母親の昨夜より悴の師宅の運きを案  
じ諸方を聞合せ藤三郎も亦子分が有ますから子分の者  
を諸方へ馳せて探させると小千谷街道地蔵河原の岸邊を  
る柳の木よ怪しい死體が吊下つて有ると早速届を出し役

浪白人五保享

人も来り件の死骸を取下して役何よか証據よ成るべき  
物をと探すと則ち天の然らしむる所歟其片脇よ死ふ次第  
權十郎の子分照吉所持の煙草入が落散て居ました是から  
足が附まして目明が段々取調へますと問もなく相解りま  
したのり當六月死よ次第の權十郎が伊太郎の妻みのを古  
寺へ引入れ強姦せんと爲た事又藤三郎の爲よ棒よて打れ  
恨を合で居る事尙又今般藤三郎を殺害の始末愈々之り權  
十郎并よ子分兩人の仕業で有ろうと云ふ所から致まして  
柳原式部大輔殿郡奉行某より權十郎へ沙汰が有まして遂  
々權十郎の召捕り尙又子分兩人も召捕られ白狀の上越  
後高田よ於て相當の處刑よも友ばふとする時よ郡奉行の  
白洲よ於て權十郎の大名を拂つて國境の要路仁左衛門

浪白人五保享

の手下だ即ち甲州巨摩郡次澤村よ於て先年有名の大驅り  
を致したる一群の者では座エますが夫より名前を變へて  
此高田へ来て死よ次第と云ふ先親分が有ます是り死よ次  
第の權三と云て最も名の高い男でげした小哥ア其養子よ  
成て權十郎廿五の曉迄の生たれども夫から先の死よ次第  
ありと身を天運よ任せた譯では座エます越後高田で爲た  
悪事の廉の只穢多の藤三郎を殺した丈けだが其前よ不圖  
お上よ關係の有る身体殊よ此草深エ高田で自由よは制敗  
の出来やすめへお手數あがら江戸へ差立を願エます聞さ  
やア今名奉行と森き亘て名前の高い大岡越前守とやらの  
梅舞臺のお白洲では處刑を云渡され度うは座エます氣  
の毒だが田舎芝居で寂滅仕度ねへから江戸の本場へ川し

享保五人白浪

てお呉んませへまし……と飽まで不敵の此高言に柳原家の役人も大に憎み共儘入牢をさせ置いて早速江戸表へ照會いたし升と共者ハ肝要の四人なれば何卒江戸へ差立呉れヨとの事にて江戸表から役人が出役致し柳原家からも送りの者が付て宿々一人ツ、手先を増まして借こそ享保十年四月迄と越後の高田から致して碓氷峠を越へ上州高崎を経て夫より泊りを重ねて遠く深谷と熊ヶ谷の合の宿駕籠原なる相摸や重助の許へ立寄りまじたまでの事では座いさす是より後談ハ熊ヶ谷の戦跡破りのお話も相成ます

第十三回

享保の十年四月十四日中仙道熊ヶ谷の驛ハ殊の外泊りが

享保五人白浪

多勢多座いまして其譯ハ本陣の泊りが越後國長岡の城主牧野備前守のお國入で有まして之が一泊し脇本陣が大坂に加番の三枝主計頭が泊り夫より角屋源助とやます此驛一等の旅人宿へ越後高田よりの差立者長脇差の死も次第權十郎事(前名山猫三次)此者へ警固のお役人及び前回は演たる手先數十人が泊込んで居ますから特よ宿内ハ非常を警戒始終鉄棒を引き宿役人の提灯を照けて東西又奔走して居ます此夜ハ宵の内から風強きがゆへ最も火の元殿重氣を注げて居ました然るも此四人の泊つて居ます角屋源助方の直接裏手と道路が有ます是ハ熊ヶ谷の裏町では座います(清き流れの細川が有り共川縁と木賃宿が有まして此宿へ宵の内から泊つて居ます年冷三十も成る

浪白人五保享

ふかと云ふ商人体の者は是れ別人あらぬ惣籠原の立塙茶  
やの亭主相摸や二代目重助事本名洲走りの熊五郎で伊座  
います故意と木賃宿へ泊り銭を少し餘計遣つて奥の三疊  
敷計りなる此家の夫婦が寐る處を借り何んど誤魔化した  
か如何僞たものか宵から其處に寐て居ましたが箱や子刻  
の時鐘コウンと告渡る頃はい熊五郎の充分身支度を  
致し其木賃宿を出て角屋源助方の裏手へ廻つて参り預て  
宵の内は確と容子を見定めて置いたと見へて盃所からし  
て放火致ました見るく内は風の強し炎々ど燃上りまし  
た大勢火事だアと宿中の騒ぎも相成さす内は盃  
早表の方へ炎が燃出す町で半鐘を摺り鳴し近傍の寺で  
のゴーンと寺鐘を撞きさすと云ふ共混雑言ん方の寺で

浪白人五保享

坐いません何よしろ大切を四人が泊つて居る家からの出  
火で伊坐いますから一同ツイと騒立て、居る處より乗  
じて洲走りの熊五郎は於て角屋源助方の正面より躍込  
んで参りましたが近附く者をば左右へ斬ッ拂い職籠惣籠  
へ近附くヨと相見えへましたが熊サア兄資確り仕させエ  
洲走の熊だ……兄資和主へ確かり仕て呉れおくチャア因  
るぜ……と云ひさから職籠籠を切破りホマを外してやり  
ました三ア、汝へ不可エ事をして呉れた俺の助つても  
到底娛樂が少なへ身体だ和主の未だ老先の有る身で誰ら  
ねへ事を仕て呉れたナア熊オ、申職云ひささん先刻  
お前が莞爾りと笑つた其時の氣の毒だアと思つたが人目も  
有るから何よ……コ斯云ふ中もマゴくしちやア居ら

享保五人白浪

れねへ……唐紙へ火がメラメラと燃移て来ま  
たから熊五郎の突然り三次を抱いて此家を飛出す所へ一  
旦逃て、逃ました手先の役人が引返して来て、手ッレ曲  
者……鳴籠破りだア！と云ふ聲を掛ますと云ふと  
追々宿の人足迄が得物くを携さへて来たのをば熊五  
郎の腰に差たる用意の脇差一振を三次は當宛たから三次  
の鬼又鐵棒忽ち之を引抜いて斬て廻り透る熊ヶ谷驛の真  
中へ躍出たる有容の實又阿雲の二王均しき所の次第で  
有ますさて斯う成て見ますと何十人と云ふ手負ひも有り  
即死も有ますから容易近附けません、甲附子を持って来  
いッレ棒ヨ繩ヨと懸立つる聲の如何も喧しふは座い升  
から越後國長岡の領主牧野備前守殿の本陣に於て目を醒

享保五人白浪

され近侍の侍士を呼れて、備コリヤ宿内が何んとかく動  
揺致す容子何事か棒事でも出来致したか、侍、ハイ……恐  
れながら上ます當宿よ四人の用宿が座りまして其  
家より突然出火致しました、能く謀り終せた事と相見へ  
升エ、一人の曲者が右猛火の盛んある所をも厭はず躍込  
んで囚人を助け右兩人とも劍戟を持って大勢の人を負傷ゆ  
手も餘るとの事で座います一方の火を消さんと致し一  
方の其曲者を取捕へんと致す所から如斯き騒ぎも相成ま  
した、が恐れながら當家の本陣と申し脇本陣の大坂は加番  
の三枝さまが逗留で座いますゆへ宿役人共よ於て何  
相濟まさる事なれば早く鎮定させたと騒ぎ居ます、が何  
分炎暑の折柄あれは次第よ寄てりは立退きを上げやう

浪百人五保享

と存じ居まして伊座います…… 備ウシ左様か…… 予が  
家來の内一人も其處へ防禦は出んか 家來前の警固を  
致して居り一人も差出し升ん 備イヤ夫は相濟ん此備前  
守が一泊致して居る處に即ち今宵一夜たりとも此熊ヶ谷  
驛の予が城下同様チヤ予が城下は於て斯る愚漢が立懸さ  
天下の法を破り火を放ち剃さへ劔戟を揮て衆人を負傷め  
るよ夫を取捕へる事が出来んと申して此牧野備前守の  
恥辱に相成り後日江戸表將軍家の取理も入つたる時如  
何よ太平の世に云ひながら武家の取理も相成るから  
予の警固よん及ん苦敷うさい一人も残らず手を揃へて出  
張なし早々其曲者を取押へて仕舞へ相願くの殺さんやう  
致せ後日詮議の手續きよ相成ろうからと明君の一言流石

浪百人五保享

のほ老中迄勤めた長岡の牧野公で伊座います是に於て供  
廻り百餘人小性徒士足輕に至る迄仕度を爲して出た  
から是れでの進り升ん遂に洲走りの熊五郎も山猫の三次  
も宿の中央まで階子捕りと成り兩人共舞々と纏められ再  
び鳴鐘籠へ載られました天此悪漢を逃じめざるの最と心  
地快い事有ます借翌日又相成ますと宿役人一同本陣へ  
み詫し出る牧野備前守殿の家來の功名を賞し大ひよ喜悅  
れまして目出度と云つて長岡へお國入と相成ました三枝  
主計頭殿は於ての大坂からお歸りと相見えまして是れま  
た江戸入と相成て仕舞ひました鴨籠へ附添て居ました  
所の役人よ於ての一時狼狽を致した事を互に恥入ました  
歟牧野の手を以て宿内の騒動も鎮定致し賊を捕縛したる

浪白人五保享

を悦び又々一挺の鴨雞籠を警固致まして江戸表へ送り升  
た借江戸表での大岡越前守の掛りよて一旦取調べまして  
兩人共傳馬町の無宿牢へ入牢中付けれました因よ由て  
テヨツと申上ますが前々回又演述たる通り彼の雲霧が甲  
州文珠ヶ岳よ於て金配當の後達摩の長次と云奴が甲州路  
よ於て捕縛よ相成り此奴命が助りたきまよ見知り人と  
相成まして此者の傳馬町の牢内よ在ると云ふの名ばかり  
で大層樂を致して居ます其後諸方から其處へ賊が捕われ  
て来る度びよ何時も長次が見知人と相成て此者の小共  
の仲間有るとかおいと云ふ此度右兩人熊ヶ谷宿から  
總よ就て來たのを引合せ升と長是の小哥の同類で雲霧  
仁左衛門の手下でげす一人の山猫三次一人の洲走熊五郎

浪白人五保享

では盛ると申立たたから一層嚴重よ右兩人を入牢させ置き  
ました達摩の長次は別牢へお返しよ相成り尙ほ大岡越前  
守殿の八方へ手配りを致まして巨魁雲霧始め其他の者を  
殺らす召捕て之を一緒よ取纏めて處刑を爲し享保三年よ  
騙られたる處の我名義を雪がんと流石の明奉行も千々よ  
心配致して居られました茲で再びお咄跡へ戻りまして享  
保九年の事では座います所の新吉原京町一丁目新店あが  
ら評判の宜い桔梗屋五郎兵衛是の大店で座います此  
所謂其頃半間籬と稱ふる流行店で座います併し誰も此  
家の主人の顔を見ぬと云ふ固より娼妓屋の内所と官位  
いで有ますから主人を見ずとも濟心事では座います  
廊中は於て桔梗や五郎兵衛の何様な人物か見た事も無い



享保五人白浪

と云ふ位ですが夫でも稼業も成た者で丁度十一月の或朝  
客人が一同起て見ると雪がフンク降て居ます琴浦と云  
ふ娼妓の部屋より色客と相見へまして前名を六さんと云  
ふ是れ別人ならぬ因果小僧の六之助では座います琴浦も  
藤子よ倚靠て雪を見ながら 琴六さん目が醒て居るノコ  
六さん 六オオ其處を締めねへナ寒くツて往けねへから  
雪が降てるの知て居るヨ 琴夜が明けちうつたが氣よ  
成るチ今朝ア是非飯ると云ひだが今日の飯らす其宜じ  
やア赤い か六ッン到底此雪じやア飯られぬへヨ殊に氣  
ン成るの最う大門又探索が詰て居るだらうから寧の事今  
日の一日流連ううかな 琴流連も宜いけれ共晝間人又顔  
を見られると往ないヨお前湯も道入ては不可いヨ 六

享保五人白浪

ナニ湯位の我慢をすらア 琴マガまた餘を酔て狂戯ての  
往ないよマ(ロウ)へ道入てお出ヨ 六(チヨッ)縁起でもねへ  
祿でもねへ言を云ふ 琴夫れは妾が失言ッたけれ共柔順  
まてお在ヨ 六夫じやア然うと仕様か 琴マ兎も角も顔  
でもお洗ひナ……と是から小妓よ命じて湯を取寄せ蒲団  
の上よて楊枝を使ひ悉皆り顔を洗て仕舞い次の間へ下り  
火鉢の傍で煙艸を喫んで居る所へ新造が來り本間の掃除  
も出来彼是する内よお跳へも参り夕宵持越しの迎い酒と  
云ので遂々先づ流連けと相成て仕舞いました春宵一刻千  
金とやますが雪の且の流連け杯は又格別な者では座いま  
せう野暮お伯圓共の知る所では座い升ん宜敷くは粹さ  
ま達のは高察の程を願ひます却説六之助は未だ朝だと思

享保五人白浪

ふ内最う晝では座います 琴六さん今の観音さまの九  
ッだよ 六「然うかい……ア、一夫じやア今朝和主が起し  
たのの稍と夜明けだと思つたが然うでも無ッたと思へる  
ア、一誠よ日が短けへなア 琴六さんお酒は能い加減よ  
お仕さ 六「イヤお前が宜い加減よ仕ると云ヤア尙呑てへ  
ヤ……今日の日朋輩も閑暇だらうから皆呼んで福引でもオ  
ッ始めやうか 琴六は宜ろうから然うしなまし 六「ウ  
……と六之助の尙も眺物を爲まして到底流連けと覺悟を  
して酒を飲始める其内は朋輩女郎も追々集つて参り 甲「  
六さん今日はお楽しみ……乙「琴浦さん羨しいネ 琴六  
さんがいじめて往けおいなさますヨ 丙「オヤ手放しで惚  
氣の無情いヨ 琴六「ア不思ですヨ……と夫から何んだ彼だ

享保五人白浪

の申誤らん言を申す青樓の有容の其身も成て見たら  
ぞ面白い事では座いませう借晝過る頃よ六之助の昨夜か  
ら續けて飲居ますゆへ十分は酩酊致し種々琴浦の朋輩  
女郎と巫山戯廻る中よ紅梅と云ふ十七八は相成る新造の  
手を掴まへて 六「コウ乃公ア最う琴浦より和女の方が餘  
ッ程可愛いから牛を馬も乗替へやうと思うんだオイ紅梅  
さんデットして居ねへ……と品垂れかゝるを振拂ひ  
紅「アレサ……六さん琴浦華魁が白眼で居ますから其様  
な事をしてますナ六さん巫山戯ヤア思ですヨ…… 六「  
何んだおアお前だッて子供じやア有るめへしウンと云ひ  
ナク……戯れどの思ひましても娼妓の嫉妬が深いから  
憤然として 琴六「紅梅はん六さんがおまはんよ岡惚れをし

たどサ 紅華魁思ですヨ……アレサ六さん巫山嵐ナヤア  
 思サ……と六之助を無理又突飛びして廊下へ飛出す六之  
 助も面白く成て参ましたから續いて飛出し 六「オイ紅梅  
 さん逃様たつて逃がしやしねへヨ……」 紅「アレサ六さん  
 往けませんヨ……」と梯子をトック 下ります六之助も  
 同じく階子を下りて欄干へ様とする 紅「アレサ六さん往  
 ませんヨ此方の内所ですヨ當家の旦那の居る所ですヨ六  
 「旦那が居たッて然んか事ア構わねへ……」乙姫さまのお宿  
 の何所だ……と大手を廣げ千鳥足よて紅梅を廊下の隈ま  
 で追詰る 紅「アレサ六さんが往ませんヨ……」と我を忘  
 れて主人の部屋へ飛込ました主人の此時左手の手烘も暖  
 り右手に本を持って居ましたが 五「紅梅じやアないか何ん

だ子供じやアあし静かよしろイ自分の容じやア有るゆへ  
 琴浦のお客か 紅「ハイ……」巫山嵐て不可いんですもの……  
 ……アレサ六さん旦那の居所ですヨ…… 六「旦那が居たッ  
 て構わねへお前又要が有るんだと云ひるがら紅梅が押へ  
 て居る障子をガラリと開け思わす見換す顔と顔 六「コレ  
 ハ……」と吃驚り障子を建切りました

第 十 四 回

御も此家の主人格様屋五郎兵衛と云へる仁の廊の内でも  
 多く其顔貌を知た者がないと云ふの別人から以是を賊の  
 巨魁雲霧仁左衛門ですから六之助も驚愕致したが流石の  
 曲者些とも素振り又出さず 六「オイ紅梅さん茲へ出ヨ  
 ……」オヤ是の旦那ですかムハハハハ免あせえまし……ン

浪白人五保享

イ酔て居たんで失禮を致した……其頃女郎家の亭主杯  
と云ふもの誠は横柄で大金を費し酒食をする客人と互  
よ顔を見合せても確よ挨拶をせぬと云ふ位の事よ成て居  
ましたから五郎兵衛の仁左衛門の苦笑ひを致して 五  
一服お喫んあせえまし毎度また傍最負を有難うは坐いま  
す…… 六「エへ、何う致やして……」と六之助も素知ら  
ぬ休又持飯し廊下へ出まして中庭の雪を眺めて居る五郎  
兵衛の聞へよがし又聲高で 五「オイ誰か来て呉れヨ 女  
ハイ……」と内妾と見えて廿四五よ相成る遊者揚りと登し  
き婦人が夫れへ来たり 羨旦那さん何んぞは用では坐い  
ますか 五「ナよ此雪を廊で見てユるのハ實は惜しいもん  
で予ア天文の考へねへが尙だ今夜の降るだらう丁度明日

浪白人五保享

の朝の雪晴れの景色だろりから小梅の別荘へ往て雪見を  
仕たいと思ふから今夜予ア小梅の別荘へ往て泊るが寮番  
の老爺は風呂でも沸まして置いと然う云て遣て呉れ余り大  
降りよ成らねへ中よチヨツと向越しをさせて誰か使者を  
…… 羨「ハイ畏りました夫れぢやア尊公今晚被入います  
か 五「然りヨ些と小降りよ成るを待て直よ出かけ一ト晩  
泊りで明日の朝別荘で雪景色を見やうと思ふのサ 羨夫  
れチヤア然う云う事よ致ませう……」此言を聞いた六之助  
の云わす語らず腹の内よて 六「ハハ一借の明日小梅の別  
荘へ来い茲じや話が出来ねへと云う謎だナ……」と早くも  
悟りましたから今迄戯れて居た相手の紅梅よ分れ二階へ  
昇て来る其様を事の敵娼の琴浦の存じませんから嫉妬交

浪白人五保享

りて内所まで飛込んだヤア有まへんか六ッイ餘り騒いで  
だんで……お部屋へ飛込んだら旦那が可怖い容貌をして  
居たッけ琴本當に体裁が悪イぢやア有ませんか廊下處  
をするやうでサ最う宜いから謹愼しくお寐あさいヨ六ッ  
寐ろたッて晝チャアねへか琴晝だッて寐ても居いじや  
ア有ませんか朋盟の女郎衆へ目移りがして戯談を云たり  
云ひれたりする酒落でも有ませうが妾ア余り心持か宜  
くおいかから六ッ、いちんくだナ琴其ナンく又誰  
がしたんだヨサ最うお酒も宜い加減よ止して御飯を喫て  
お寐あさいヨ六ッ坊やの好い兒だ熱睡しろかチあは、  
夫れチャア御意見よ從ッて寐ると住やうか……と是か

浪白人五保享

ら六之助の横よまり六ッ一華魁今紅梅さん又嘲弄ひな  
がら思のす内所へ飛込んで旦那と思う人又會て体裁か懸  
いから一ト通りの愛想氣もねへ挨拶をして置たが彼の  
旦那幾才位だろウ彼りやア琴然うですチ此櫻の旦那  
の儘か三十五六でせうか六ッ一其様あものか好い男だ  
チ琴ハア立派な男さまッワ六ッお前アノ旦那の素性を  
知てゐるかイ一体何處の出生の人だエ琴何んだかア  
ノ尾張の名古屋出生で大町人の子息さんだてエ事で六ッ  
ッン然うかい名古屋出生か……予ア又江戸ッ子の様だ  
思た琴ハア江戸も居たんで坐いませうヨ六ッシテ  
何時頃から此地へ店を出したんだエ琴然うですチ儘か  
七年ばかりよ成すやが妾の前結梗屋の時分から禿をし

浪白人五保享

て居たんですヨ 六然うかいぢヤア附け渡りだき今の且  
那の如何だニ評判は 琴ハア恐ろしい慈悲深い人で万事  
よ能く気が注ぎますリ此廊中でも當樓の旦那も助けられ  
た人が大層有ますヨ 六然うかいお内室さん持たない  
のかイ 琴ハア方々から縁談の世話をする者が有ますけ  
れ共女房も持たないてお内妻ばかり 六ア、ア彼の二十  
四五も成るチヨいと粹さ中年増が内妻だき 琴ハアお秀  
さんと云う 六然うかい何者だニ彼りヤア 琴廊の藝妓  
ですヨ 六然うかい……時よ旦那の小梅も別荘が有ると  
云うが引船通りの彼家が此樓の別荘かい 琴ナニ前の結  
繩屋から附け渡りなんですヨ 六お前往た事が有るかイ  
琴ハア火災の時よ往きましたワ 六何様な別荘だニ

浪白人五保享

琴大層廣いお坐敷が有まして時々旦那が往きますよ吾妻  
の森の此方の 六ア、ア曳船通りの中程だき如何でも宜  
いから寐やうくと是から六之助琴浦の晝寐の夢を結び  
ました其夜も茲へ泊りまして翌朝も成ると琴浦も知合て  
居る間柄で有ますから 琴六さん夜が明けたヨ 六ヨ  
……と早速口嗽洗手をして六之助も於てわ雪の翌朝の裸  
体虫の洗濯雪晴れて天気も宜しく暖氣で座いさす送  
したる琴浦の後朝の名残りを惜しむ六之助の仲の町へ出  
まして丁度大門の所へ來ましたが未だ會所へ手先や何よ  
かも歸めない時分で座いますから造化好妙と日本堤へ  
出まして是より聖天町から山の宿へ來たり向越しを致  
して向島三圍稻荷の處から寺島へ道入りまして茲を横切

浪白人五保享

り小梅の奥船通り吾妻森の邊まで来たりましたが廣い所  
で有ますから何處かで聞いて見やうと思ひと見ると前途  
から岡持を提げて男が遣て来ますから六エ若しく……  
お前さん又チト物が伺ひたうは座いますか此邊又吉原の  
桔梗屋の寮が有ませうか男ハイ今小荷が出て参りました  
アノ細い路をお往なさると槇木の生垣が有ますソレ奇座  
ある土蔵が見へませう彼處の家が桔梗屋の別荘で伊座いま  
す六エ、エ、エ、然うですか大きき有難う……と致へられた  
る通り来て見ると成程風流ナ一ト構へ有難ハ遊女家の別  
荘と相見へました正面の門を這入りまして玄關と云う程  
厳格でも居ませんが入り口は障子が二枚建て居ます六エ  
へお願ひ申す……と七十許りも相成る老爺

浪白人五保享

が夫れへ出て 笠お入来あさいまし……六エ、桔梗屋  
さんの別荘ハ此方さまで…… 笠ハイ當家で……貴郎わ  
儘か六さんと彼仰るお方じやア有ませんか六イヤ能く  
は存じで 笠昨夜旦那が被入いまして明日の朝殊も寄る  
と廿五六も成る好い男で其名ハ六さんと云う人が茲へ来  
るかも知れんとコト被仰いましてからお待ち申して居ま  
したサ何卒お昇んあさいまし應ぞ通路が泥濘しては難澁で  
は座いましたらふへ、此邊は田舎では座いますから霜  
の雪が積りましたから必定し御難澁で有ましたる  
う六有難う……轉ずる参りました 笠此方へ……  
と六之助を六疊許りの小坐敷へ上げまして 笠只今お煙  
の火を差上げますヨ旦那さまは風呂で座いますか

享保五人白浪

ら伺ひましたら彼の別室へ通して置けとコト被仰いまし  
た貴郎其處から庭下駄を履いて庭石仰ひよ向うの別室へ  
……彼處にはお火も澤山有ますから六然うですか是の  
種々お世話さまで……とはから六之助の庭の景色を眺め  
ながら最と風流なる所の構造も感心致して彼の別室へ來  
りて見ると爐も切て有り釜も掛けて有り風流行届いて居  
る体裁禪がチャンと二枚布いて有り桐の胴丸の手焔が中  
央に出で煎茶器も並んで居ます六の助の煙艸を煮らせて  
居る中庭下駄の音が致ましたから六さての……と思  
て居ますと仁左衛門の聲として五老爺や夫れぢやアノ  
ウ客人が來たら徐々例の詠へ物をして呉れ夫れから三圍  
へ往て餘の好いのが有るなら取て置いて呉れると斯う云

享保五人白浪

て宜いかイ 爺へイ畏まりました夫れじやア旦那さま小  
倉庵と三圍と兩方取て參ますから五ウん其往きがけよ  
風呂の火を見て呉れ尙だ遣入り人が有るから遣過ぎよ  
吉原のお秀や何か來るてユから 爺へイ畏りましたして  
座います 五能く門を閉めて置けヨ……ア最う往て仕  
舞たかとはから當家の主人持梗屋五兵衛の仁左衛門が障  
子を開けて上へ昇り座よ着きました今更六之助も体裁悪  
氣よモチくしながら 六エへ、今日雪の翌朝で大  
きよ暖氣う座ニます 五イヤ其儀事の如何でも宜い  
時よ六一別以來暫く會ひあかつたなア…… 六何うも  
誠よ掛け違ひまして…… 丁度甲州でお袂別れ申してから  
指折り數へて見ると七八年よ成やす日 五ウん然うだッ



享保五人白浪

たナ併し、汝も無事で何時も若へナ 六「へ、有難う……」  
五「成程男の好いてエもの、違つたもんだ七八年以前も目  
今も同事だ 六「へ、有難うは座エます……」 五「如何し  
ても婦女に可愛がられると奇麗だナ 六「へ、久振りで  
嘲弄へしちやア往けませせん 五「ナニ嘲弄へしやアしねへ  
が、悦んで呉れ知ての通りの予の身分内所も隠れて居て  
も出来る稼業だから七年の間今日まで嫌疑も掛らねへが  
是から已降の知れねへ事吉原の繁昌お土地で有りながら  
身を匿すよの屈竟の場所だ今の世の中テチャア在所より吉  
原の方が余程宜いヤ 六「大きき左様で居座エます……」  
五「昨日の謎が能く解けて早く来て呉れたナ 六「エ、有難  
う存じます……」 五「時よ昨夜予も此家へ来て種々考へ

享保五人白浪

て祝たが貴様ア予の家へ二三年來る事を盛張り氣が附か  
あんだが琴浦の客よ六さんと云う情夫が有るとの聞いて  
居たが余固貴様じやアないと思つたが現時の身分のなんだ  
エ 六「エナよ別よ身分もないので 五「本郷邊の紀伊國屋  
てエ藥種商の子息さんと云ふの、和郎が玉帳よ在るなア  
六「エ、左様で……」 五「眞實かい 六「ナに菊坂よ煤蒸ッ  
てた事が有るんで表が藥種商の紀伊國屋てエのが有まし  
て其裏よ居ましたから出鱈目よ紀伊國屋の子息と云ひや  
したので 五「當時の何處よ居るんだエ 六「何處ッて定り  
の有ませせん 五「ないたッて何年となく何處よ 六「別よ極  
ツた譯もあいのです時よ貴公さん樓の二階へ昇ては厄介  
よ成てると云うやうな譯で 五「ワン女房を持って居ねへの

享保五人白浪

かイ 六「面倒だから併し尊公さんの家の琴浦ハヤ小  
の女房見たやうなもんで小塚原へ一ト晩千住へ一ト晩品  
川新宿と泊り廻り素人家に居る氣遣は座へません變  
所を小哥の跡所よ致して居やす 五「夫れで稼業ヲ 六「然  
う聞かれちやア困りますが稼業の宜しくは推量を……  
五「汝未だ止めねへナ 六「イヤ親方の前でげすが之を止  
やア喰へませんから持たが病天の授ける營業でげすもの  
五「イヤ夫りやア六之助約束が違うだろり忘れもしね甲  
州で一世一代の大仕業をした時又文珠ケ岳の文珠堂で三  
十六人の子分を集め其時子が素ッ張り異見をしたッて盃  
り奉じやアねへ夫々へ分よ過ぎたる金子の配當眞人間よ  
成て呉れヨと子が願むやうよして訣別れたんだから今時

享保五人白浪

分責 六「杯ア立派よ成て居るだろりと思つて居た所昨夜から  
汝の遊ひやうを見るに如何も氣よ入らねへから若しや然  
うかと思つたが未だよ止まねへ汝の性根最う宜い加減よ止  
めろ不可い言ア云はねへから 六「イヤ有難うは座エやす  
…… 五「今日ハ租々ハ馳走をして二三日汝を此別荘へ  
泊めて置き汝の料理も聞うと思つたが老込んだから氣が短  
く成た汝如何したら止められるんだ今の中よ些と共小  
口を聞かして呉れ 六「イヤ左様で坐エます夫れハ資  
本を宛行て呉れて何うか商業でも始めて氣よ入た女房を  
持たして呉れ、バ止みます今までの何分目的かないから  
止められねへので、ハ、相變らず孤鼠く遣て居まし  
たので 五「氣よ入た女房とい 六「貴郎さん家の琴浦彼奴

浪白人五保享

が一番小町の氣に入るので彼婦を女房よお呉んなすッ  
て少しでも資本を宛行てお呉んなされバ夫れで止みます  
五、ム、ウ……商樂の貴様何よが氣に入らんだ何業を遣  
て見たいと思う 六、左様サ考へ慣ねへ事だから何よが  
宜うは坐いませうチ…… 五、如何た汝女郎屋を始めたら  
六、宜うがアすナ何處で 五、矢張り吉原でヨ併し最初ッ  
から長考よやアあれねへ一概よやると人目よ立つから西  
河岸ヘアヨン、格子を出して予の出店新格屋と名を  
附けて予の處の琴浦のまだ年季が三年有るから惜しい玉  
だけれども証文を捲いて汝よ還るから夫婦も成て女郎屋  
を始めたら如何だエまた予の處で賣れねへ間離よ三年壁  
八年トウ、お職よ成兼る玉でも小格子へ並べて置けば

浪白人五保享

大店のまぐれ者でも小店でハ十把一ト東の大道の賣物  
同様却て相手の有るもんだから一番叩いて見たら如何だ  
エ 六、エ、宜うは坐エやせう夫丈けの事をして下されば  
…… 五、屹度してやろうじやアねへか 六、其奴ア有難う  
は坐います…… 然りありやア因果じやアねへや福の神の  
六之助で…… 五、併し汝琴浦よ何んと云う汝の内幕を知  
てるのか 六、エ、大承知なんで 五、危険な女だナ何時頃  
から 六、最う二三年已前から 五、泥棒だてエ事をか 六、  
エへ、其處が惚れてますから詮方がねへので 五、コ、  
宜い加減よしろイ惚氣チヤア不可へ 六、ナ、本當の  
事でお前さんの泥棒だと云たんですから小町も本音を吹  
いたので琴浦が種々氣を利して夜の明けない中、大門を

浪白人五保享

出ろ隠密が詰めて居るから氣を附けるノ今夜の客人わ可  
怖人だから大さか聲をして話をするから小者の脊中よ幽  
靈と石塔の刺墨が有る事も知てますから晝間成丈け  
湯へ入れないような筆段をして華魁の前子を泥棒と知た  
ら愛想が盡きたろう多くのひと一緒に無る稼業だからと  
時々小者が「カ」を掛けるど馬鹿らしい言を云ひますナ  
惚れたが因果如何して可愛お前さんよ愛想あんぞが  
ませう若し疑ぐるあら何様な心中でも爲やうと云うか  
ら髪を切たり指を斬たり其様な時代な事をするのわ思だ  
が何うするんだと云たら妾も罪を拵へ客の枕投しでも仕  
たらお前さんの疑念も晴るだらうてニ末頼母しい料簡の  
女で五此野郎大變ナ事を相談したナ彼様も可愛らしい

浪白人五保享

容貌をしてエて其様お料簡の奴かオ、劍呑くモ止り  
て呉れ宜いかア、一氣味が悪く成て来た二階中の女郎が  
皆盗ッ賊根性を出すと詮方がねへと流石わ親分子分わ好  
いもんで是从か六之助も湯又這入り酒肴も来たから腹  
しく酒を飲合ひ六彌々親方の云ふ通りに成るよん琴浦  
又斯う云ひませう當家の旦那わ予か幼稚い時尾州で別れ  
た伯父甥と云つたら宜う座やせうと素ッ張り琴浦ぐ  
るみ騙し是より致して金子の威勢で吉原の西河岸よ賣家  
の有たのを悉皆引受けて新桔梗屋六右衛門と名を改め所  
望の通り琴浦を女房よ貰ひ島田鬚を丸鬚よ結ひ直し内所  
へ坐てお内儀さんと謂われ六之助も茲でマッ女郎屋の且  
那と成ましたが其當座は珍らしい物を嗜くが浮世の人情



浪白人五保享

あれば大層流行りました何んどあれば女郎は氣を揃へて  
容人を大切にする蠶の物や何かの利純を薄くし升て従て  
假も廉く酒の量も宜しく夜具も新しいと云うので小格子  
へ轉寐よ来る客も湯へ入れ下戸よは菓子を喰わせ茶の  
時者よの好い茶を入れて之を喫せ寒いと云へば熱い湯  
へ入れるし熱いと云へば水へ入れる……正可水へは入れ  
ますまの斯う云う鹽梅ゆへ大層評判が宜しいから先づ茶  
見ど名附る者が甲「オイ今度の西河岸の新桔梗屋へ一番  
打ッ喰して見ろイ大層あもんだぜ乙「俺も其話わ聞いた  
が本當かア甲「本當ノ嘘のツて滅方界をもんだぜ華魁を  
買て一ト晩五兩七兩て金子を費うよりの百か四百の  
端下錢で大名遊びの真似が出来らア轉寐の客よも酒が一

浪白人五保享

盃よヲヨツとした下物が出て第一夜具が好いケン床だ  
乙「ウン女郎わ何人居るんだ甲「二拾人斗り居るが一分で  
買のを僅か四百で買へるんだ乙「ム、ウ滅方界廉いな  
甲「夫れよ玉揃いだ第一身袋が好いやあ召縮緬の十枚位  
重ねて着て居らア乙「ヤイ、先刻から黙て聞いてりや  
ア宜い氣よ成りやアがッて……お召縮緬を十枚も重ねて  
着て居ちやア動けめへ甲「ナニ其位は持て、時々二枚位  
ツ、着るんだらう乙「何を云やアがるんだと大層よ流行  
ました是ハ享保九年の冬の事で御座います然るよ翌十年  
の春頃から六之助が不圖した仲間の寄合いから賭事よ係  
りまして御座いますが根か嗜な事ゆへ夫れから夫れへと  
友が出来漸々放蕩よ成て忽ち此身代を傾けて仕舞ひま

浪白人五保享

した目今で少し買れる女郎の直を能く他家へ住替へま  
出し借金も追々殖へる容子ゆへ琴浦も殊の他心配致しま  
して京町の泊父さん即ち桔梗屋五郎兵衛の處へ時々無心  
よ來ると百兩の宜いワ五十兩の宜いと何時も小言を云ひ  
あがら出して呉れませす夫れでも如何したッて追ッ附きま  
せん享保十年の夏季も経過ましてモ一秋の甫めと相成ま  
すと云うと殆ど新桔梗屋の身代の息遣いて仕舞ひました  
此頃で六之助の十日程も遊びよ出たッ切り歸て來ませ  
ん店よの稍と娼妓の四五人きやア居ませんが毎晩お茶を  
與く事ばかり有樂繁昌の流行店ありし新桔梗屋も今ハ  
ヤ名のみよして寂寥たる所の有容で有ます薄ッ暗い行燈  
の下よ立て居る長吉と云う妓夫を呼ぶ者が有ます 男

浪白人五保享

イ長云く長吉の河ッ暗から本當に解りません透して見  
ながら 長何んだエ其處よ素ッ裸体で居る人の……何程  
ぼかく陽氣が暖エたッて裸体でエの……誰だエ誰だ  
六誰でもねへ予だ…… 長オヤ旦那でげすか……裸体  
でお在あさるから私ハ旦那の思ひませんだッたア如何  
なすッた 六如何なすッたつて負りやア詮方がねへ先刻  
から茲よ立て、誰か來たらとコ一思つたが久振りで家へ  
道入るんだが正可素ッ裸じやア往けねへから汝其着物を  
ナヨいと貸して呉れ 長貸して呉れッて私も着たッ切り  
で坐います 六汝ハ構ハねへ外飾エするに及ばねへ  
長だッて旦那裸体でお客を曳ッ張る事ア出來やせん  
六構はねへから裸体で曳ッ張れ 長へイ……左様なら汚

浪白人五保享

穢う座いますヨ……イヤ帯丈けお貸しなすッて……  
と長吉の裸体へ帯をゆめて 長旦那も追剥ぎも逢ふの  
始めてだと囁いて居る處へ素見が参りました 長エヒ  
、、如何さまで評判の新桔梗屋でお遊び遊ばしての如  
何さまで格別な散財のさいやうよ取計ひますニヒ、  
甲「オヤ此若衆の裸体だナ 長へイ熱う御座いますから  
甲「何程熱いからつて裸体で客を曳ッ張る奴が有るかイ  
長「エヒ、、何卒お登壇を…… 乙「客人が裸体も成る  
てエ端相だらう有難エ辻占だ此様を不縁起ナ處へ昇る奴  
が有るものかとお茶を挽いて仕舞ふやうな譯で彌々鼻が  
曲て來ての詮方が有りませぬ六之助の澄してオイト上へ  
昇りました 琴旦那さまお歸んあさいお前さん羽織や何

浪白人五保享

か如何したノ 六「羽織の他家へ預けて來た 琴「何處へ  
六「大音寺前の竹屋と云ふ家へ 琴「可思お若物じやア有ま  
せんか 六「ウン詮方がねへナ 琴「オヤ店の長吉の若物を  
着て居るんですネ 六「ハ、ハ、推量の通り久しく女房よ  
お目も係らんから……是の正しく長吉のを借衣と云う酒  
落の如何だ 琴「戯談じやア有ませぬヨ最う大抵了解たお  
前さん勝負事の止めてお呉んなさい 誠々氣が揉めて遊り  
ませんから 六「エ、イ歸り早く愚痴を云うねへ赤い顔で  
琴浦さんと云てた時分の豪勢人を迷はしたか世話女房よ  
成て理屈を云われチャア驚くなア 唄「お疎めやした其時  
よと云われての堪らねへ 琴「氣樂な言ばかり云てお在る  
さる 六「何よしる酒ニ 琴「ハイ……と飽まで惚れて居る



浪白人五保享

二百四十八  
問柄ゆへ早速酒肴の用意を致しましてお琴が酌をする一杯  
二盃と飲んで居る中六之助の酒の上の不良男では坐い  
ますから是より現在の親方殊に當時伯父の名目も成て居  
る桔梗屋五郎兵衛の處へ暴れ込むと云う六之助の強談場  
三の切の講談に相成ります

第十五四回

桔梗屋五郎兵衛の土蔵の二階へ無理矢理六之助の手を  
曳いて連れ昇り五六之助其處へ坐われ汝今夜大層酔て  
居て聲高し顔でもねへ事を云ひううだから近傍の者が氣  
を揉で止めるも聞かず土蔵へ連れて来たが其處へ坐れ  
何よか氣よ入らねへ事があるら如何でもするから坐  
れ六之助の此時前後忘却する程大醉して居ました六

浪白人五保享

ユ、イ(嘆び)斯んな土蔵の中迄連れて来られチャアお堪り  
がねへオイ伯父さんイヤサ親方親分仁左衛門さん 五、コ  
レ、何を云う其様な言を云ひそうだから此處へ連れて  
来尤も此處チャア大抵の處で何處へも聞へねへが汝  
何んぞ予も恨でも有るか汝も意味を受る覺への無が……  
六、夫リチャアお前さんの世話も成たよ違ねへ金子を出し  
て貰つたよ違へねへけれど夫リチャア當然だ 五、當然と  
何んの言だ當然と云ふ言の有り佛の顔も三度とやら  
ウ、云つて汝の云う言を肯て居れば汝の爲よあらん  
から先刻お琴が無心よ来た時銀一文も出来ねへ金子の出  
る木を持チャア居ず井戸から金が湧きやアしないよ云つ  
て歸したがお琴が家へ歸つて此事を告げるや否や汝が飛

浪白人五保享

んで来て暴れ込んでの悪口雑言其内又大事も洩れりうだ  
から此處へ連れて来て来た今酔て居やうだが能く氣を鎮めて  
聞け當然と何んの言だ六當然と云たが如何した親分  
だつて手分だつて篋棒奴根が他人だ氣まづい言を云ふ様  
だが扶持切米を貰つた主人てエ譯チヤアあし根が道なら  
ねへ窃ッ盗の提灯持から仕揚げた六之助コウ親方を  
チヤア堅氣よ成つて大黒柱で座はと真面目な顔を爲て  
居るが以前を糺せば窃ッ盗云のすれ知れた事ながら人の  
知らぬ悪事を働らき充分金子が手に入れたから勝手よ付  
て止めあすつたろうが夫あら吉原へ来て枯匣屋五郎兵衛  
と名前を換へ人も知らさず隠れて居て此儘疊の上で往  
生する事が出来るなら誰でもやらかす窃ッ盗商賣小奇よ

浪白人五保享

逢たの百年目だ千や二千の端下金を仕送つたとして左のみ  
思よ着せるコヤア及ぶめへ小奇も此春からお前さんよ種  
々無心を爲たが高の知れた目腐れ金今日の盆の十二日越  
すよ越されぬ年の關裸体で歸て来たよ寄てお前さんの  
へ百兩計り借り様と思ひ女房を遣したんだ所が仙益錢一  
文も借す事が出来ないと云ひれへ脈がねへから飛んで  
来たんだ出来ザア如何も詮方がねへ到底投げ出した此  
身体恐れあがらとぶつかりやアお氣の毒だがお前も永  
正月の有るめへ此言葉よ雲霧仁左衛門も腹の中で憎い奴  
どの思ひましたか何よ成つても流石の大達物莞爾笑つて  
六之助の前へ兩手を突き五六之助成程然う云われて  
見れば尤も千萬是りやア予が悪かつた扶持切米で遣つた

享保五人白浪

主人チャア有めへ天理よ背いた竊ッ盗汝も然ら云れチャ  
ア面目ねへモ何も云ねへ六腹の立の尤だ堪忍して呉れ  
ろ今汝が荒氣を出て恐れあがらと訴へる杯と云れれチャ  
ア汝の身体に宜るうが予計りチャアねへ汝も知つて居る  
通り木原店と呉服屋を出して繁昌して居る木鼠の吉又馬  
道よ搦米屋を爲て居る上總屋傳助本名あさらば小僧の傳  
次此而人の極の堅氣汝と予との争ひから若しや彼奴等兩  
人の身の上でも及ぶ事有ての親方も大人氣ねへ赤子  
又等しき六之助と錢金を出さねへと云ふしみたれ  
争ひから内輪揉めがして乃公等迄喰ひ込んだと云れ  
チャア如何にも予が彼兩人に對して濟まねへけれどと云れ  
が云ふ通り到底永へ正月のあるめへが何卒最う一二年の

享保五人白浪

所を忍耐して呉れサ金子の予が機許でも遣るとふせ子が  
無へから此身代は皆あ汝も遣るから持て往て遣へ日よ百  
兩ッ、遣ても知れたもんだ六何卒機嫌を直して呉れ誰も  
見て居ねへから謝罪も堪忍して呉れ……仁者よ敵なし此  
時六之助の酒の酔も醒ると根が馬鹿で無い奴だからッ  
く泣出しました六ア、一親方濟まねへ不圖言をすま  
した……飽までも強く出られたら此方も強く出る氣だつ  
たが然う柳よ出られチャア面目ねへ前さんも大變よ察  
察人だが身分が出來ると然うも氣が折れるものかね濟ま  
いことを爲された何卒堪忍して下だせへ親分堪忍して呉  
んなせへやし……五六汝泣が……今其泣涙の眞實の涙  
だりれが眞人間よなる始だア、予も嬉しい六親方最う

浪白人五保享

金子は要りません親方小哥のお願へでげすが些と計り小  
遣をお呉んなせへ是から一番氣を變へて上方へ往き金刀  
羅様へ参詣してへが是迄悪い事を爲たから神参りを爲た  
ッて利益もあるめへが心ゆかせ又然う爲やうと思ふから  
路用を些と計りお呉んさせへ新桔梗屋の店に潰すとも潰  
さねへどもお琴よ預けて往きますから宜しく喰ひして遣  
て置てお呉んさせへよし 五六俄も變る汝の言葉りれ  
本性か 六借金が大層有つて此益が越せぬへ位の譯で  
五ムー……仁左衛門ハヤツと考へ 五成程夫れが宜ろう  
夫れチャア六然うと決心爲た方が宜ろうお琴の事ハ心配  
するナ予の方へ引取るニヤア及ばん新桔梗屋も汝が荒し  
た跡だが娼妓を十人も増し引札を廻し最う一番予が叩き

浪白人五保享

直すから却て汝と云ふ錢を費ふ虫が居あく成つたら彼身  
代も持直すかも知れぬへお琴を女主人として叩きあげれ  
ば千や二千の出來様から汝の上方見物も宜ろう善い急げ  
てニから寧の事今夜ハ此處へ泊つて明日の朝參明も立て  
往キヤア予の道中着や道中指もある故スツパリ揃へて置  
から委細揃わず跡の野とされ山櫻子も任して察明立と出  
掛けるイ 六へイ有難う伊座エます……併し親分なれば  
こり子分なればこり悪まれ口の不敵腐れを申しましたお  
愛想つかし 五然んな事ハ何うでも宜いマア酒でも飲め  
六有難う存じます…… 五今お琴も呼びよ遣らうと是  
から土蔵の中を出て奥坐敷へ参り酒肴の用意を爲てお琴  
を呼びよ遣り右の始末を断すとお琴も六之助よ別れるの

浪白人五保享

ん思だが其方が身代の爲めも宜らうと思ひ 琴六さん  
夫れチヤア妾しが一年でも半年でも伯父さんを力よして  
最り一回稼業を爲て見るから安心してお在斯う云ふ成程  
きから別れるのは否だけれどもお前京大坂へ往ても羨し  
い藝妓さんも有し娼妓とやらも有るから氣の浮く事も有  
りませうが成丈け浮氣を爲さないやうにして下さい妾は一  
生懸命に稼業をするから 六串殿云つチヤア往けねへ伯  
父さんよ對しても其様お馬鹿な事が出来るもんか 五  
ア 二人共痴話は宜い加減にして呉れ予も送つて往く  
丁度年廻りも悪いから川崎の大船迄一緒に往う 六夫れ  
の有難うは座へます 五夫れ此間歐洲の遊樂者から種  
々遣ひ物を貰つた返禮も有るから歸途は歐洲へ廻つて歸

浪白人五保享

で歸らうと思ふから明朝一緒に往うと茲で支度も出来別  
段路用の金を百兩胴巻へ入れて六之助も渡し一切残る方  
さく氣を注げて遣り翌日は剛ち享保十年七月十三日では  
座います女房のお琴は流石な名残りが惜まれたるから吉  
原土手迄送り出し桔梗屋五郎兵衛新桔梗屋六右衛門の兩  
人の足元輕き草鞋穿菅の笠を手も持て其頃の事ゆえ腕車  
へも乗らず駕籠へ乗りもせず日本堤へ出ました 琴六さ  
ん 随分は無事で 六チヤア願ひヨ 琴ハイ………ホロリと  
落す一ト車是を見て五郎兵衛が腹の中で 五ア、一跡へ  
残つたお琴が惘然うたと口の内訂連れ立て是より山谷堀  
から船へ乗りまして高輪へ船が着きました頃は潮が悪る  
うは座いましたから十三日の巳刻時分で有ました 五六



浪白人五保享

歩行て來ても此位又は來れるナ。六然うです。ね。燈。燭。の。端。の。處。が。滅。方。潮。が。悪。く。つ。て。船。頭。も。氣。を。揉。で。仕。廻。さ。し。た。ね。五。如。何。だ。六。高。輪。で。一。杯。や。ろ。う。か。六。少。し。腹。が。北。山。時。當。と。來。や。し。た。か。ら。一。杯。遣。り。や。せ。う。五。柳。屋。に。仕。な。う。か。景色。が。宜。い。か。ら。六。方。清。あ。た。り。で。も。宜。う。御。座。い。ま。せ。う。女。入。ら。ッ。し。や。い。ぬ。昇。り。遊。ば。せ。ぬ。中。食。で。御。座。い。升。か。三。何。が。出。來。る。へ。女。御。座。い。ま。す。五。極。り。だ。さ。じ。や。六。如。何。の。鹽。燒。又。鯛。の。蒲。燒。を。女。ハ。イ。畏。り。ま。し。た。……六。如。何。ん。ナ。ヨ。イ。ど。お。茶。碗。の。種。の。何。ん。だ。エ。六。イ。タ。ラ。貝。六。宜。か。ろ。う。店。の。脇。又。疊。が。大。層。有。つ。た。が。彼。れ。を。湯。煮。て。呉。れる。事。も。の。往。か。あ。い。か。女。も。客。様。よ。お。上。げ。申。す。の。の。失。禮。で。す。か。ら。家。内。の。者。が。喫。へ。様。と。思。ひ。ま。し。て。……お。好。み。あ。ら。う。い。て。差。

浪白人五保享

上げませう是れから酒肴が揃ひ五郎兵衛も飲み六之助も素より飲ながら六。親分昨夜の事堪忍して下せへ五。馬鹿ア云へ真面目ナ面アして居たつて根が蕨樂者だ六。然うどの思つても濟ません考へると面目赤くて……五。イヤ面目無い事を覺へてくれバ宜い是れから先隠分樂し。えだか箱根が少し離儀だ向ふへ往つて見て置きてエ所の(セ。イ。テ。ン。寺。邊。區。味。面。白。く。い。ね。へ。が。大。井。川。咄。の。種。だ。佐。與。の。中。山。の。館。の。餅。で。も。喫。へ。六。ハ。イ。く。五。夫。れ。か。ら。遠。州。濱。然。別。よ。見。所。の。無。へ。が。吉。田。へ。往。たら。女。郎。を。買。て。見。ろ。一。晩。六。ハ。イ。く。五。名。古。屋。を。見。物。し。て。彼。か。ら。マ。イ。ガ。セ。へ。出。て。近。江。路。へ。掛。つ。て。草。津。か。ら。大。津。へ。掛。り。京。都。の。見。物。を。先。よ。す。る。

浪白人五保享

んだ京都へ往つたら伏見の見て置て宜いな伏見から船へ  
乗て大坂の八軒家へ着き大和巡りの歸途にして大坂から  
該岐の金刀比羅へ往て中園を見て長崎迄も往てはい金子  
が盡たら手紙を遣せ何時でも爲換を振つて遣る六成程  
重寶あ世の中でげすナ夫れ然うと最う晝過手習ひ子の  
歸へる時分だが未刻でげせう……姉さん何時だニ下  
ハイ未刻で六ヤア出掛けやせう思ひの外運く成りや  
したと此所を出たのが未刻頃で品川の裏道しを越せば知  
れぬへと思つたが彼處へ往く二人連れに吉原の桔梗屋の  
旦那旦那お奇りささい杯と余計あ世事を聞あくらやア  
あらぬへから裏通しを爲よう六夫れが宜う御座エやせ  
うと橋向ふへ掛りブラリくと山道を道草ア喰つて往く

浪白人五保享

本宿から致しまして殿津の濱川通へ来たのの彼は申の下  
刻で一方の海岸では座います五六ウナヨイと一杯飲ろ  
うかナ六親分今夜の何處へ泊る積りです五然うサ  
此處ヤア陸方がねへ泊り場所が半間も成つたが如何だ  
今夜の其所イから潮騒へ乗つて六郷を渡つて運くとも  
川崎へ乗込んで川崎の宿中の女郎を惣揚げよして田舎騒  
ぎよドシ一騒いで氣の利いたのを一人りでも二人りで  
も代り番個も抱いて寐るてエの如何だ六其奴ア有難  
エな如何も五宅ニ歸つてお琴よだまつてるから六其  
奴ア如何も難有てエ氣を入たのが何人有やせう五何八  
だつて其様も買つても詮方がねエ六ヤア然うしやせ  
う濱川の夜食の宜い加減に爲て置ら此家が宜らうと成



浪白人五保享

飲食店へ昇り酒肴を命じ酒酌のみ及び六之助もスツバ  
酔て仕舞舌も廻らぬ位も成りました桔梗屋五郎兵衛も  
能く酔ひました 六「オイ」 親方徐々出掛けやせう最う  
日が暮れちまつた…… 姉さん勘定を聞てお呉れ 下女「ハ  
イ」勘定の二人り様は一緒に頂戴致ませうか 六「当然  
ヨ江戸ツ子だ別」又出付を持って来る奴が有もんか何程  
だ「下女「ハイ一分二朱ト六百文で傍坐います 五「廉い  
ナア姉さんツラヨ……」お釣りの前も上げるよ 下女「オ  
ヤ先刻も戴きまして和濟ません有難う存じ升……」 旦那方  
の今晚の川崎へ夜越しに往らしやいますか 五「ア、好い  
月だから……」最う何時だ「下女「彼是酉下刻で傍坐いま  
せう 五「ツッ然うか……」出掛けやう宿の主人が 享主

浪白人五保享

旦那方火繩をお持遊ませ 六「ナ」火繩ア……煙草の火も  
でもするのにか「享主「イエ大森へお係りよありますと人  
間へ喰ひ附く悪い犬が居ますが火繩を持って在ッしやると  
火繩の臭ひで犬が逃げますから 五「ハ」氣味の悪い  
享主「イエ何ん共する氣遣ひには坐いませんが煙草の火  
のは用心かた」此繩をお持あすつて…… 五「チャア六  
持て往けと細竹又巻き附けて有のを持ち此家を出て敷十  
歩参りますと「ゴ」ザブーりと鈴ヶ森の浜打際へ掛つて来  
りました遙か又聞ゆる遠寺の鐘がボーン 五「六之助如何  
だ」好い景色チャアねへか繪にも描けねへナ 六「然う  
です好い景色ですナ思はず海邊の岩端に乗て見渡せば此  
處の名又負ふ袖ヶ浦向ふの安房の小松原浜森々として物

寝く後ろの池上大井の里小笹の中の石碑は残る七字のは  
ね蜜目時しも盆の十三日月の五れど木下開よ白きの馬の  
調騎遙かよ開ゆる常念佛の音も最と哀れよて眼よ見耳  
よ聞もの總じて無常を感ずる媒介となれり東海道の内大  
江戸の入口も往來途絶て國として居ます六親方ア鈴ケ  
森だぬエ此處の五ウツン鈴ケ森ヨ六最り些と先へ往こ  
うぢやア有りやせんか五マア急がすよ一服喚りやアと  
腰から火打道具を取出しカチーリ  
六親方お前俺を殺ろすのだナ五當然だ死んで呉れ……  
六斯うなりやア俺も一生懸命だ……と手負ひあがらも  
浪打際よて扱合せたる六之助一上一下と切結ぶ手練の匂

第十六回

で仁左衛門の再び切込み六之助が右の肩先より乳の下  
けて血煙り諸共アツ……と流石の六之助も後べよドウと  
倒れあがら六人殺しいと云ふのを取て押へ付け候よ止  
めを刺んとする臨終の際よ六之助が六欺し討ちどい卑  
怯千万と云ふを押へて雲霧が五サア近頃卑怯な振舞だ  
が如何も汝を生存して置と昨日も云ふ通り木賊吉や上総  
屋傳助と成て居るかさらば小僧よ予が義理が立たねへか  
ら無撥汝を引出して殺す覺悟の鈴ケ森此處の死出の旅立  
だ何んよも云の死んで呉れエ予も喉いか早いとか同じ所  
の土よ成る覺悟だ一ト足先へ冥途の先觸れ何にも云わす  
往生して呉れどもがき廻る六之助を取て押へ止めの刀を  
只マ一刺トウく息の根の絶へたるを月明りよて打見や

享保五人白浪

り眼に持つ涙ならくく  
した機ももの十二三の時分  
と云ひ云われ築地門跡の地  
ら左の小指が一本無いので  
りの頭分香中よ刺墨たの石  
相か不便と思つたが詮方が  
ウ先刻臨終の際も云ふ通り  
公等もは上の厄介も成り此  
物して居て呉れ南無阿彌陀  
あがら刀の血を押拭ひ六又  
した百雨の此方へ預つて置  
山をんだサ浪打際で何卒成  
仁ア、一詮方がないから殺

享保五人白浪

處の浪間六之助の死骸をザ  
霧が吉原差て立歸る知るも  
漏る、世の習ひ其翌日則ち  
立の大師参りの江戸ッ子二  
た六之助の死骸を見附けて  
居處エ追々往來人が來たり  
代官伊豆山江川太郎左衛門  
が此處を通行致まして此死  
見て居た江戸ッ子二人の關  
宿の番屋へ引揚げて段々改  
が二十六七よて極めて美男  
石塔と幽霊の刺墨が有り粉  
跡を問まして雲

浪白人五保享

博多の帯を締め懐中よの何もさく掛け守を懸け火はたき  
の付た煙脚入を提げ腰の物は伊座いません是の雲霧が持  
てたもんです疵所の左の肩先へ一ト太刀右の肩先より  
左の乳の下へ掛け是が余程の深手で止めが刺して有ます  
其他招刺さ疵數ヶ所有ます青地三平の一ト手帳は認め  
町方大岡越前守殿の方から兼て代官江川氏へ夫々通知の  
有ましたお尋ね者の因果小僧の死骸で有ますから早速大  
岡越前守殿へ通知致すと大岡越前守より致して例の馬場  
奥徳右衛門岡本良助の兩名が出役して最早腐敗しかつ  
て居るを盡く見届け侍馬場の半内から見知り人達郎の長  
次を引出し來り引合せますと全く雲霧仁左衛門第二の子  
分因果小僧の六之助の死體は相違い無いと云ひ立違郎の

浪白人五保享

長次ハ半内へ歸り馬場岡本の兩士の何者も殺されたか登  
夫物取りで有まい何か手係りの無いかと種々改めまし  
たが外よ手掛りの無い只紺天鷲絨の掛守りが肌よ付いて  
居ります流石の雲霧もこれよの氣が注おかつた若ど見へ  
ます其掛守りの中よの水天宮の守が一枚變り錢が一箇  
錢が三粒と鼠判の請取やうの者が有ました一旦濡れたん  
で有ますから火へ干して能く見ると

免

一極上壁油

登梅

此代金壹貳百文

新拮榎屋親方様

馬道万屋仕切判

として月日が消へて居ります其處には職掌です馬場流

浪白人五保享

積梗屋とハナナ……新の字杯を付けるの多く色里か越  
て花柳街に限る真面目商人の家名も新の字杯を付ける  
事の餘りあい殊に馬道として有ますから早速ながら馬道  
の方屋と云ふ醬油屋(是の酒屋で座い升)を呼び上げて綱  
べますと萬屋是れ六月下旬吉原西河岸の新積梗  
屋六右衛門方へ賣りました受取書で座います馬場新  
積梗屋と云ふ何んだ萬やへ西河岸の遊女屋でこれは  
京町の積梗屋五郎兵衛の出店では座います馬場ウッ宜  
いと萬屋は下げられました(但共頃極上々の醬油一樽の代  
が一貫貳百文と云ふすれ尤も醬油の廉價ある時分では有ます  
是は只御参考まで申上置きます)是より致しまして吉原  
町へ問者(現今の探偵では座います)を入れてスッパッ探り

浪白人五保享

を附けますと云ふと七月十三日の朝早く積梗屋五郎兵衛  
と今一人若い人が吉原を出て五郎兵衛が翌十四日の晩  
歸つて来たと云ふ是より役人が半内より連摩の長次を引  
出し翌月代を致し立派な常体の人仕立手先が附添つて  
十五日の夜よお店者の登遊びと云ふ觸込みで京町の積梗  
屋五郎兵衛方へ入こませ事に托へて内所を探らせると主  
人五郎兵衛は雲霧仁左衛門に違ひ無いと云ふから確と見  
届け秘密よ致して此趣を越前守殿へ言上すると越前守殿  
よ於いて何かある奇賊を捕り損なつては一大事で有るか  
ら充分予配りを致せと彼是する内に着手なりましたは  
恰と享保十年七月廿日では座いました吉原町へ物打入と  
云ふ事と相成ました鶏を割よ何んぞ牛刀を用ひんやと云

浪白人五保享

ふ事が有ますけれども出沒自在變現極りなしと云ふ雲霧  
仁左衛門を捕るので有ますから容易ならざる捕物では座  
います馬場與惣右衛門岡本良助石子伴作中田伊右衛門是  
の前年甲州沢村事件以来の關係人なれば一層奮發致さ  
なければありませぬ兩町奉行所附屬の手先五十餘人其他  
最寄の處人足八十餘人を頼みよありました是は森反甫  
から致しまして大音寺前邊より總べて吉原の東西を警護ま  
した大門の夜の戌刻時限り一時通行を禁じ一々姓名を調  
べて往來人を通すと云う嚴重の手配りが出来ましたスル  
と此時桔梗屋五郎兵衛の左様な事を一向知りませんから  
五今夜の盆の十六日の餘りが来たを見へて大變お客が  
立込む容子だが能く粗忽のさいやうよ氣を注いで呉れ……

浪白人五保享

また花魁達も眠むからうがお客人へ腹を立たさんやうよ  
機嫌を取て歸して呉れ、ば何んぞ禮をするぞ「還手婆」の笑  
ひおがら 婆親方然うしておやり遊ばして下されば願ひ  
ませう 五お前も眠むからうが茶の濃いのも飲んで居  
て呉れ 婆ハイ燈籠の代り目では坐いますから衆見が多  
いと思ひましたか當樓でも大層出来ましたよ 五有難  
い事だお前達の骨折りで次第又繁昌して此様な有難へ事  
のねへと凡夫盛ん又神祟らず人間も落目よ成ての陰方が  
有ません有難雲霧程の者も是れよの氣が附きませんで居  
ます所へ戸外から駒下駄のまゝで飛込んで来た婦人が有  
ます 若オイ、何んだつて下駄ア履いたまんまで昇る  
んだエ 琴ナニ妾だエ堪忍して呉れ……伯父さんの

浪白人五保享

ふ事が有ますけれども出沒自在現極りなしと云ふ雲霧  
仁左衛門を捕るので有ますから容易ならざる捕物では座  
います馬場與惣右衛門岡本良助石子伴作中田伊右衛門是  
の前年甲州沢村事件以来の關係人なれば一層奮發致さ  
なければありませぬ兩町奉行所附屬の手先五十餘人其他  
最寄の處人足八十餘人を顧みよありました是は森反甫  
から致しまして大音寺前邊より總べて吉原の東西を警護ま  
した大門の夜の戌刻時限り一時通行を禁じ一々姓名を調  
べて往來人を通すと云う嚴重の手配りが出来ましたスル  
と此時桔梗屋五郎兵衛の左様な事を一向知りませぬから  
五今夜の盆の十六日の餘りが来たを見へて大變お客が  
立込む容子だが能く粗忽のさいやうよ氣を注て呉れ……

浪白人五保享

また花魁達も眠むからうがお客人へ腹を立たさんやうよ  
機嫌を取て歸して呉れ、ば何んぞ禮をするぞ遣手婆の笑  
ひあがら 婆親方然うしておやり遊ばして下されば聞み  
ませう 五お前も眠むからうが茶の濃いのでも飲んで居  
て呉れ 婆ハイ燈籠の代り目では坐いますから宗見が多  
いと思ひましたが當樓でも大層出来ました五有難  
い事だお前達の骨折りで次第又繁昌して此様な有難へ事  
のねへと凡夫盛ん又神祟らず人間も落目又成ての詮方が  
有ません有難雲霧程の者も是れよの氣が附きませんで居  
ます所へ戸外から駒下駄のまゝで飛込んで来た婦人が有  
ます 若オイ、何んだつて下駄ア履いたまんまで昇る  
んだニ 琴ナニ妾だニ堪忍して呉れ……伯父さんの

浪白人五保享

若「親方」の奥よ……オヤ是の出店のお内儀さん此免なさい  
まし……お琴の其儘奥へ飛込んで参り 琴親方さん今日  
り……五「オヤ」お琴かサマアく 此方へ来る 琴伯父さ  
ん急よ尊公よお目よ係りたい事が有て出まじたがドイカ  
か人拂ひを……五「何んだニ……」と云ひながら釣瓶方の  
煙艸盆を提げて尤も廣い座敷へ参り 五「何んだ……」琴  
親方嘘か眞實か知りませんが今揚屋町の多使の金八さん  
が歸て来て咄を致します何んだか知りませんがお上から  
お役人が大層廊内へ入込んで大盗賊どやらを捕縛ると云  
う夫れが女郎屋のほ亭主よ大盗賊が化けて居たんですと  
夫れが露見して亥刻時分から大騒ぎよ成るから大切の物  
わ本家の土藏へ入れたら宜かろう火事が始まるかも知れ

浪白人五保享

さいとやまして誠又氣よ成ますからお知らせサます 五「  
……」と雲霧が早くも二階の客へ眼を注げ 五「ア！容  
子の違た珍らしい初會の客が多いと思たが……然うか  
琴さても是まで手配りが出来た事と見へる今更置すよ  
匠されず予が其方よ云て聞かせる言が有るから館く聞い  
て呉れ斯う云ふ内も心が急くから抜捕んで話をするが汝  
の何も知るめへけれと尾州名古屋の醫者の子息と偽た此  
五郎兵衛の筋ッ盗だ夫リヤア名古屋屋出生よア違へねへ  
が雲霧仁左衛門と云う泥棒だ今迄の匿れて居たが天知る  
地知る人知る儘何時までお上へは厄介をかけたも御まん  
から一層の事此方から名乗り出て難敵口までも花々しい  
事をして然うして一番纏よ係って見やうと思うからお前わ



浪白人五保享

何事跡へ殘て念佛の一遍も稱へて呉れ不思議を縁で六之  
助の女房とあり予の姪だとか何んとか云たものだから満  
更他人と云ひ思ひれあいとハロリと浴す一ト申お尋も涙を  
拂ひまして 琴モ一斯う成ての詮方が有ません……が斯  
う云り時よ六さんでもお側又居ましたら少しわお手助け  
よ成ませうもの……知らぬ事と云ひながら修行の爲  
め又上方へ行き六さんハモ一今夜頃ハ遠州路へ保た時分  
で有ませうと羨む日敷を屈指て居ますが佐與の中山わ  
う起へせしたらうから逆も問又合ません 五、ハ、ウ……  
臥して居て罪だから云て聞かせるが佐與の中山所じやア  
ぬへ今頃六わ劔の山を越たろうヨ 琴、エ、…… 仁、お尋  
堪忍しろ到底永い正月わ有るめへどの思たが仲間の奴等

浪白人五保享

の爲めを思ひ出た曉よ欺くらかし鈴ヶ森で予が手よかけ  
殺して仕舞た 琴、エ、…… 左様ら尊公が 仁、サ予ア汝の  
良人の仇敵だお尋堪忍して呉れ……共代わり所有金わ後  
らでも興るから手留り次第又持て往け然うして善長亭主  
そ持ち生漕安泰よ生活て呉れ不義の富貴ハ浮べる雲ア、  
一最う是非がねへ是まで……と云われお尋の暫くの問  
泣き倒れて居ました共中よ金龍山の九ツの時鐘が鳴ると  
云うと廊中引けを合圖又致し疎て手配りの附いて居た事  
と見へて表梯子から 捕丁上意く……と込と入る家内から  
最前客と思ひし人々皆官の役人よして嚴然しき捕手の  
銘々東西南北より詰寄せました此時雲霧ハ 仁、心得たり  
と土藏へ這入り身支度又及びまして身輕き所の打掛と

浪白人五保享

あり一刀を引抜きまして其處へ躍り出ました 役上役人  
へ對し手向ひあすか盜賊の張本雲霧仁左衛門尋常よ繩よ  
か、れ……ト左右から致しまして召捕んと群り來るを雲霧  
仁左衛門は於ての手當り放し廻り廻る因て廊中一般俄か  
の騒ぎと相成り「ワァー」ッと京町一丁目二丁目住町堀  
屋町江戸仲の町総て五町中の騒ぎと相成まして座い  
ますが上役人も容易ならざる捕者どもひ汕断なくして  
役早く召捕れニと下知を傳へて居る中よまたも一  
人此所へ火事裝束よて刀を引抜き群がるうちより斬て  
出て上役人へ手向ひ致すものが有ますから 役また一人  
増たぞ何者かど云う中よ彼の曲者の東西南北へ斬捲り秋  
葉の常燈明の影の所まで來ると雲霧も一方を廻れて此處

浪白人五保享

へ來たり互に見換す顔と顔 仁イヤ……傳次じやアねへ  
か 傳親方吉原が火事だつてエから直に支度ウして來て  
見ると此騒ぎゆへ途中で侍の刀を強奪つて尊公をお助け  
すしよ來やしたヨ 仁イヤ眞面目の町人は成た汝が手と  
一緒に喰ひ込んだんじやア氣の毒だ 傳ナニ到底前途短う  
は座ニやすモ一是れ小僧も老る年だ尊公さんと一緒に往  
きやせう……ト上役人へ空を掴まして置いて反浦から鎮  
築港を飛越へ一方を脱けて夜の丑刻過ぎよ日本橋木原店  
の木鼠小僧吉五郎の所へ参りました此者ハ即ち前回よも陳  
べました近江屋と相成て居ます呉服商です此方も吉原よ  
火事が有ると云う半鐘を聞いて木鼠吉も出かけやうかと  
思て居た所へ表から飛込んで來たは異形の体一人ハ巨魁

浪白人五保享

雲霧仁左衛門一人の絶へて久しく面會せんおさらば傳次  
ゆへ吉五郎も驚いて 吉如何した時と聞くとコレ、  
と云うから茲に於て木鼠吉も根が侍で有ますから應方  
強し早くも覺悟を極め 吉モ一是れまでだ親方の死  
時は一縷も死のうと小哥まけは約束を爲されたが能く來  
てお呉んなせエやした、永い事榮輝榮華をしました到底  
の上で往生が出來るもんキヤアとせへやせん夫れキヤ  
お待ちあせへままど二人りを二階へ昇げて酒肴の用意を  
致し召使う所の(共頃)雇人との申せせん奉公人とヤ  
た番頭君い者掛廻り丁稚飯炊よ至るまで残らず其家へ十  
八人の者を呼びまして 吉さて汝等よの恥かしいが今ま  
で予を何んと思つて居た實ア予わ近江出生キヤアあいな長州

浪白人五保享

の出生で木鼠の吉五郎と云う窃盗共家も長く使われ  
て必死し身体も汚れたらう今仲間が奴が来たよ因て逃げ  
るども死ぬとも勝手よし予此家へ火をかける決心だ  
何もしろ我様等も茲にやア居られめへが此家も在る蜀江  
の錦でも何んでも勝手よし土藏へ這入て手當り放廻持てる  
丈け春食て往けモ一暫時經過とほ上から手が這入て不正  
品と成れば塵ツ葉一本でも手の附けやうがあいかると云  
ひれて家の奉公人の悦んで 甲夫れの有難うひ坐います  
……と一時涙の跡したる怒の恐ろしいもので店の賣物土  
藏の物と怒張たの怒張らないのキヤア有ませんお石縋縋  
を五十八反よ秩父縋を三十疋帯を八筋身体へ巻附け糸縋  
を二疋着へ結び附けて往くと云ふ騒ぎ頭部へ縮縋を二疋

浪白人五保享

乗けて居ると云う異形の姿で只で往來が歩行けないか  
軒店の角で吉原から引上げの役人よ出會ひ事の顛末を  
關べるよ木原店よ雲霧が立籠つて居る事が解りましたか  
ら例の馬場岡本中田石子の四名が空しく引揚げた手先五  
十人を引率して木原店へ來ると近江屋の店わ開ッ放し二  
階の戸障子を開け酒樽を擔ぎ揚げ腰を掛けて居ますわ盜  
賊なから往昔漢土よて桃園よ天地を祭りて幾を結びし  
羽趙飛立徳の赴きが少し有ました此時石子伴作中田伊右  
衛門の兩名大音を颯げて兩名汝雲霧仁左衛門并よ手下  
の者共能く聞けヨ抑も今を去る七年前甲州よ於て其方共  
奉行大岡越前守殿は名前を騙り茨澤村文政の許よ於て大

浪白人五保享

金をバ奪取り其後行衛を失ひしが天網恢恢疎よして洩さ  
ず事今日よ至り最早遁れぬ天の網汝等が名前を詐稱し石  
子伴作中田伊右衛門が再び縁有て汝等の捕手に向たり何  
時までも上役人へ手向ひ致して罪を重ぬるぞ遁れん慮と  
諦めて尋常よ細よかれと中田石子の兩名が事を分けて  
大音よ演べると流石の仁左衛門も二階から致して持たる  
刀を大地へ投出し其身も下へ下りて参り役人の前へ馳さ  
仁永年の間伊苦勞を相掛け何共相濟みません……最長  
天運の盡きる所覺悟致して尋常よ細よを頂戴致ます中  
田よ、ウ神妙で有るぞ其心底で有りながら何故先刻わ手  
向ひ致した仁賣めて臨終よ望んで一ト花咲せやうと存  
じ引れ者の小哥よ上へ對し恐れを省みざる段重々お詫を

享保五人白浪

申上げます……と最も健氣な大牛の寝るが如し己下の二人も同じく尋常な體よ就きまして一度町奉行の假牢へ入れば尙ほ朝へ上げ傳馬町の牢へお下げな相成り何の遠慮の長次が見知人で有ます乃で發端よる話を致し升た通り享保十年秋八月大井の里鈴ヶ森よ於て五人の者が磔柱を並べました是の時の奉行の名義を詐稱り偽役の罪尙また關所破りよ因てなり遠慮の長次の幾程もかく牢内よて類病を發し煩悶死よ死んだと云ふ悪人あがら獅子心中の虫間諜よ成た憎しみで御座いませう尙だ洩れたる所も有ますが大畧の是までの事で御座います

享保五人白浪 終

講談速記新版廣告

- 邑井吉源講演 全 ●慶安陰謀録 賣價廿五錢 郵税六錢
- 松林伯圓講演 全 ●水戸光國公記 全
- 松林伯圓講演 全 ●爲朝小僧 全
- 田邊大龍講演 全 ●寬永御前試合 全
- 雙龍齋貞鏡講演 全 ●尼子十傑傳 全
- 雙龍齋貞鏡講演 全 ●佐野鹿十郎 全
- 松林伯圓講演 全 ●享保五人白浪 賣價廿五錢 郵税六錢
- 雙龍齋貞鏡講演 全 ●寬政力士傳 全
- 田邊大龍講演 全 ●日本左衛門 全
- 田邊大龍講演 全 ●鼠小僧 全
- 田邊大龍講演 全 ●因果小僧 全
- 田邊大龍講演 全 ●鬼神於松 全

明治廿八年十一月十八日印刷  
明治廿八年十一月廿九日發行

版權所有  
享保五白人白浪

講演者

若林義行

東京市京橋區木挽町四丁目七番地

發行者

池村鶴吉

東京市日本橋區濱町二丁目十一番地

發行者

服部喜太郎

東京市日本橋區新和泉町一番地

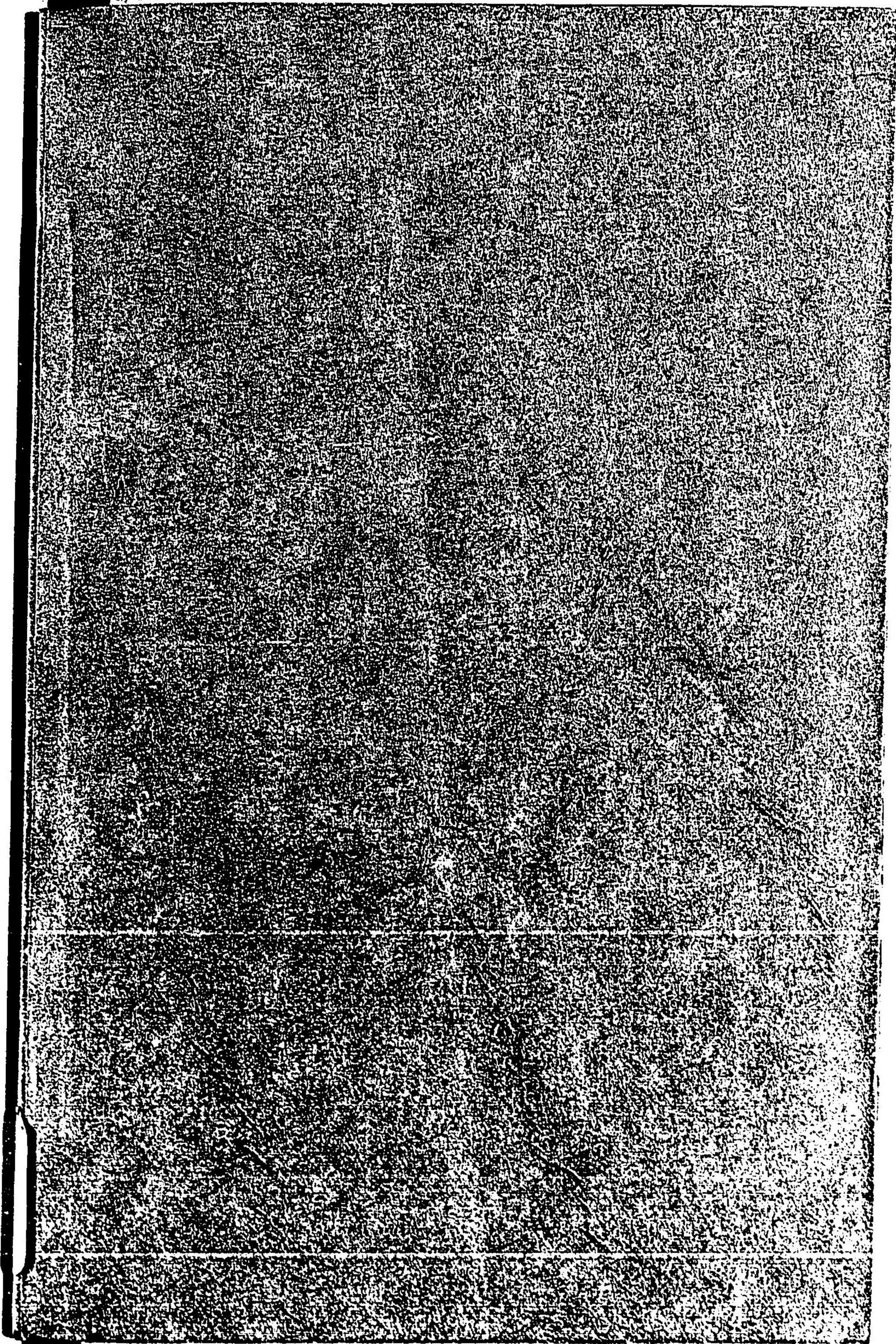
印刷者

瀧川三代太郎

東京市日本橋區新和泉町一番地

印刷所

今古堂活版所





特9

51

096838-000-6

特9-51

享保五人白浪

松林 伯円/講演

M28

DBS-0563

